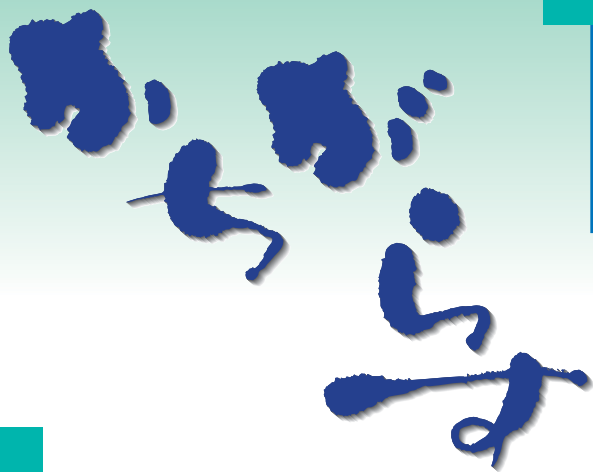


SAGA UNIVERSITY



佐賀大学広報誌 第5号 2005

セカンドステージ

長谷川学長2期目の抱負を語る



平成17年10月1日より、佐賀大学学長として、2期目を迎えることになった長谷川照学長に抱負を伺いました。

Q1 1期目では、新生佐賀大学の誕生、大学の法人化と大きな波を経験されてこられたわけですが、最も苦労されたのは、どのような点ですか？

第1期では、「ソフト・ランディング」を指導原理として経営・運営を進めてまいりましたが、実は経験のないものが多く、「ハード・ランディング」の連続でした。

まず、統合の問題です。佐賀大学が「2つの大学から構成されている」から「5つの学部から構成されている」と実感出来るには時間が必要です。理工学部も長い間「理・工学部」でした。文化教育学部も苦労されている最中と推察されます。しかし、大学が法人化という大改革に突入している現在、悠長に構えてはいられません。中期目標の期間には名実共に新生佐賀大学に生まれ変わらねばなりません。

法人化後の最初の「ハード・ランディング」は「予算編成」でした。従来、「予算配分」は教育と研究の現状を維持し充実させるものであり、新しい教育と研究は「概算要求」として文部科学省に要求してきました。「予算編成」は「予算配分」と「概算要求」の二つを含むものと考えました。編成

と配分の違いはここにあります。経営と運営の違いと言ってもよいでしょう。大学改革推進経費と学内COEは全学および各学部のそれぞれ新しい教育研究への挑戦に当てられた経費です。

次の「ハード・ランディング」は特別教育研究支援経費の要求です。従来概算要求に対応してはいますが性格のまったく異なる内容のものです。行政の効率化を促す運営費交付金の毎年1%減を補填する競争的資金であること、継続性の保証されない短期的な資金であること、さらに学部横断的の事業あるいは外部との連携事業に対する事業である事などです。とくに他大学にない特色がある事業で且つ実績が要求されます。そして何よりも法人の主たる財源である運営費交付金の増となる競争的資金です。どのような支援事業を要求するか、役員会の初めての課題でした。

決算もまた「ハード・ランディング」で今までにない財務諸表の作成作業とその見方に苦労しました。大学の主たる業務である教育と研究の全てに対して財務諸表に収益を乗せることは無理です。また単年度決算の運営費交付金では長期の財政計画を立てることは出来ません。企業経営と大きく異なる上に前例のない「国立大学法人」の財務諸表の作成にはプロの会計士も戸惑っています。

Q2 学長ご自身、1期目を振り返って、どのような成果を出したと思われるますか？

法人化の制度は成果主義に基づいて設計され、その運用もまた成果主義で貫かれています。大学に企業と同じような成果主義を導入することは不可能ですが、成果主義は目標と計画を抜きにしては考えられません。大学に相応しい中期目標計画の作成が極めて重要であることを改めて認識しました。さて、その成果ですが、平成16年度の佐賀大学の法人の業務を対象とした活動の成果は、「平成16事業年度報告書」にまとめられ文部科学省の大学評価委員会



平成17年10月からの新役員

学 長	長谷川 照之	あきら
理 事(教育・学生担当)・副学長	小島 孝	たか
理 事(研究・企画・産学連携担当)・副学長	西河 貞和	かつ
理 事(国際貢献・人事労務担当)・副学長	古賀 文博	きよ
理 事(社会貢献・医療・広報担当)・副学長	向井 清馬	あきら
理 事(財務・改革担当)・事務局長	野田 明	あきら
理 事(法務担当・非常勤)	前野 明	あきら
監 事	野中 明	あきら
監 事(非常勤)	野崎 稔	あきら

(監事は平成16年4月から)

長谷川学長2期目の抱負を語る



は せ が わ あ き ら
学長 長谷川 照

京都大学大学院理学研究科博士課程単位取得退学後、佐賀大学工学部へ、昭和46年理学博士(京都大学)、平成7年に工学部教授、評議員、副学長、理工学部長を経て、平成15年10月1日、統合後の佐賀大学の初代学長に就任。専門は、原子核理論(物理学)。

「学まなびの城」「和へいわの城」「智ちえの城」でありたい

思いたい。少なくとも授業料の値上げを考えるときの原点はここに定めたいものです。

役員会には「授業料を値上げしない」方針で了解を求めました。理由は二つ、一つは平成17年度の運営費交付金が増加していたことです。授業料の値上げについて国民の支持を得ることは難しい。二つ目の理由は、国立大学法人の授業料については標準額の10%以内で各法人が自由に定めることが出来ることになっている。全ての法人が横並びで同調することは、「法人化の精神」に反するのではないか。若干の議論はありましたが、理事の皆さんの理解を得ることが出来ました。感謝しています。この段階で、私は値上げをしない国立大学法人は10大学以上あると思っていました。

Q4 佐賀大学長として2期目を迎えられるわけですが、これから佐賀大学をどのように持っていきたいと思われますか？

第一は佐賀大学憲章の制定と考えています。法人化の一年目は、何はともあれ順調にスタート出来ることだけを考えてきました。二年目にあたり、佐賀大学はどの様にありたいかを考える時期に来ていると思います。佐賀大学は、佐賀大学の役員、学生が学問の府としての誇りの持てる大学(学)の城)

・年齢、性別、国籍、宗教の違いをのりこえる国際的に開かれた大学(和の城)

・地域の文化をバネに新たな文明を創造する大学(智の城)

そして、佐賀の県民、市民が誇りとする大学(城は人なり)でありたいと願っています。

第二は本学文系分野の改組です。私 は前記の広報誌2号で「科学技術立国・経済優先のもとで抑圧されてきた文系諸分野を解放する。解放する鍵は国際化と情報技術の活用である。」と述べてきました。そのために、文系基礎学の育成、デュアル・ディグリープログラムの締結、英語教育の充実、教員養成カリキュラムの研究など準備を

進めてまいりました。文系諸分野の国際化である「国際学部構想」を具体的に描く段階にきていると思っています。

第三は教育環境の整備です。佐賀大学は教育先導大学として各部署で教育改革に取り組んでいます。このところ文部科学省の教育支援プログラムである特色G P、現代G P、大学院G P、教員養成G P、医療G P等の公募を巡って全国的な高等教育の開発コンペが目白押しです。本学では高等教育開発センターを地域に学ぶ新しい教育の拠点として位置づけています。平成16年度は教員養成カリキュラムの開発に取り組んできました。今後は多岐にわたる教育プログラムの開発に守備範囲を広げる必要があります。ハード面に

ついては経営協議会外部委員から「大学構内が汚い」との強い指摘がありました。大学構内を若者の活気のあるまち、国際的なまち、知的創造の場に相応しいコミュニケーション作り而努力したいと思っています。

第四は統合の実質的な内容を示す「医文理融合」総合大学院博士課程の実現です。実現に向けて、プロジェクト研究など融合分野の育成、博士課程の教員確保のための人事計画とその遂行、鹿児島大学大学院連合農学研究科の改革など克服すべき問題があります。実現した時の喜びを想定して取り組みたいと思っています。多くの方々のご協力をお願いします。

文系分野の強化を目指して





の評価を受けたところ(注)。教育研究の評価は毎年行われませんが、中期年次計画の進捗状況は詳細に亘って評価室に集約されています。評価の結果も重要なことですが、膨大な年次計画の点検作業を完成させたことも大きな成果です。目標と計画の設定とその進捗状況の点検こそ成果主義の真骨頂です。成果主義に対する意識改革の第一歩を踏み出したと思っています。

広報誌『かちがらす』第2号で佐賀大学の4つの挑戦を紹介しました。挑戦は着実に成果を挙げています。

国立大学法人は文部科学省の担っていた役割を代わって担うようになりました。従来科学技術立国の下で抑制さ

れてきた文系諸分野を開放する緒に就くことが出来たと思っています。国際貢献推進室は、諸外国の大学を駆け巡り、デュアル・ディグリー制度を内容とする学術交流を広げました。将来、文系を中心に据えた国際学部を構想するときの礎を築いています。また、小城鍋島文庫を取り上げて本学における文系基礎学確立の狼煙を揚げました。

来年、地域学歴史文化研究センターが発足を目指しています。佐賀地域には古文書、古漢籍が豊富に存在しています。この研究センターから、多くの新たな発見、知見が世界に発信されるでしょう。

最近複数の大学外の方から「佐賀大

学の『露出』が多くなりましたね」と言われました。はじめは「何か悪いことが露見したのか」と心配しましたが、露出とは新聞、テレビ等で記事にされ「佐賀大学の存在感が出てきた」という意味とのことでした。「広報」の役割、目的を再認識しました。本学の広報室は法人化後発足してまだ間もないですが、その活動の成果 外に向けては佐賀大学の存在感を示し、内に向けては佐賀大学に誇りを持たせるは十分に評価できます。

Q3 今年度の授業料に関して伺います。佐賀大学は、授業料の据え置きを

全国の国立大学の中で最初に打ち出しました。また、全学的な据え置きを決定したのは、唯一佐賀大学だけです。組織のトップとして、大変な決断が必要だったのではないのでしょうか？

私は、学部は私立大学で、大学院は国立大学で学びました。私の研究分野は、学部の卒業研究から始まり大学院で博士前期、博士後期の課程でテーマを絞り、佐賀大学で博士論文に辿り着いて、原子核理論であると一人前の顔をして今日に至っています。教育を受けている間、先生方の教育の熱意に授業料の違いを感じたことはありませんでした。授業料は学生の生活、親の生活に影響を与えるものです。次代を託する若者の教育にかかる費用は公費と

佐賀の県民、市民が 誇りとする大学を

(注) 佐賀大学 HP <http://www.saga-u.ac.jp> の新着情報「平成16 事業年度に係る業務の実績に関する評価結果」参照

教えることの苦勞

日本語であれば、日本人だったら、だれでも教えられると思われるかもしれないが、それは間違いである。母語話者は、表現したい意味に応じて文法的に正しい文を作ることができるが、頭の中にある文法を、もちろん、日本語の場合も、説明することはできない。たとえば、初級の学生を悩ませるものにこんなものがある。なぜ、(2) aと(2) bのように、「かえる」という同じ音の動詞なのに、一方は「てください」の前で、(1) aと(1) bのように「か

- (1) a. (正) いえに かえって ください。
'Please go home.'
b. (誤) いえに かえて ください。
c. (誤) じゅうえんだまに かえってください。
d. (正) じゅうえんだまに かえて ください。
'Please exchange it with 10-yen coins.'
- (2) a. いえに かえる。
e.g., 'He will go home.'
b. じゅうえんだまに かえる。
e.g., 'He will exchange it with 10-yen coins.'

えつ」と小さな「つ」がなければならず、他方は「てください」の前で、(1) cと(1) dのように「かえ」と小さな「つ」があつてはいけないのか。「る」で終わる動詞で、他動詞が自動詞かで決まるのか、それとも、意味によって決まるのか。日本語のすべての動詞についてそれぞれ活用を覚えるしかないのか。このような質問に系統だった信頼できる答えを与え、留学生が創造的な言語使用ができるように留学生に日本語を教えなければならぬ。このため、センター教員はさまざまな分野で研究し、それを、第2言語あるいは外国語として日本語を教えることに活かしている。研究分野は、日本語教育学、日本語音声学、異文化間コミュニケーション学、国語学、言語学、応用言語学など、各人各様である。この多様性が、多種多様な留学生への対応も可能にしていると思われる。



「栄の国まつり」に参加した佐賀大学の留学生たち
(前列左から二人目が古賀弘毅助教授)

生活や修学に関する相談

留学生は家族から遠く離れて勉強しており、異文化での生活や学業で、ストレスを感じることが多いようである。日本は、社会も、大学も、まだ開放的とはいえない、つまり、外国人や見ず知らずの人に分かりにくい。このために、留学生にとって適応が難しいようである。留学生から様々な相談を受ける。たとえば、「日本語ができて、指導教員と率直に話すことができない」「奨学金がもらえるとわかってきたら、もらえないことが来てみてわかった」「アルバイトで忙しくて勉強する時間が取れず、うまく履修できない」「同じ研究室の日本人の学生から嫌がらせを受けている」「授業料を払えないので、支払いを半年遅らせることができないうちに研究したい内容が変わってきたので指導教員

を変えることができるか」など、実に多様で、対応に苦慮するようなものもある。

日本文化・事情を知るために1年に3・4回、研修旅行などで留学生を京都・大阪などの関西、沖縄、佐賀のパルーン・フェスティバル、佐賀の村岡屋見学会などに引率するなど、留学生間の交流や留学生と日本人学生との交流を促進している。

留学生にとっては貴重な体験

留学生の中には、たとえば、佐賀大学の修士号を取得して自国に戻り、母校の大学で講師の職を得たりする学生も多い。そして、異文化を乗り越えて称号を取得した場合、学業のみならず、人間的にも成熟することも多い。このように留学生には貴重な体験ができる。加えて、少子化による日本人の入学希望者数の減少中、留学生が研究室や大学に異文化の視点を与え、研究やクラブ活動の多様化をもたらしたり、日本人学生との交流により日本人学生の意識や考え方をより成熟したものにすることもできる。このように留学生と日本人学生の両方にとって有益であると信じて、センター教員一同、日々、一生懸命、仕事をしている。



留学生センター 助教授
古賀 弘毅

九州屈指の留学生の数

～経験豊富な教員が、きめこまやかに指導～

日本語コースの運営・授業

留学生センターは、現在、センター長（理工学部教授の兼任）、教授1名と助教授4名の教員が仕事をしている。教育・研究施設で、専任教員は、(1)日本語・日本事情の授業を留学生に行い、(2)留学生の生活や修学に関する相談に対応している。

留学生センターの授業を受講する留学生はさまざまである。日本の国から奨学金を得て大学院に入る前に、日本語を週に13～18コマ、半年または1年間勉強する留学生。佐賀大学が交流協定を結んでいる海外の大学（約50校ある）から1年間、自分の専攻の科目と日本事情を英語で学びながら、同時に日本語を学ぶ留学生。また、大学に入学した留学生や、その家族、佐

賀大学に日本人の学生と同じように受験して入学した学部学生の留学生も日本語を学んでいる。

佐賀大学の留学生は、様々な国から来ている。出身地が多様であるため、留学生に教える際は、こちらの意図や意味をすべての留学生に明確に伝えることに苦労する。なぜそうするのか、そうすることで何が得られるのかをいっつも明確に伝えなければならぬ。少しでも油断すると、自分の意図と反した解釈をされることがよくある。この点では、留学歴のある教員が多いので、留学生としての自身の経験をセンターでの指導や教育に活かしている。また、留学生センターでは日本語はチームで教える（たとえば、週6コマの授業を3人の教員が教える）ことが多いので、時間内に担当部分を必ず終えなければ



留学生の数は年々増えつづけており、平成17年度は、約300名である。学生総数に占める留学生の比率は九州の国立大学では、九州大学に次いで2番目に高い。

中国、韓国、インドネシア、マレーシア、バングラデシュ、スリランカ、タイ、ヴェトナム、ネパール、台湾、エジプト、カンボジア、パレスチナ、ルーマニア、ミャンマー、リビア、メキシコ、マダガスカル、オーストラリア、フランス、ギニアの全21カ国から来ている。



短期留学プログラム修了式で、長谷川照学長より修了証書を授与される留学生

ならず、一般の大学の講義とは異なる難しさやプレッシャーがある。

さらに、留学生センターでは、それぞれの日本語コースの担当の教員が中心になってプログラムを運営し、開講式、入学式、閉講式、修了式といったものも催している。



がんばる子供たちを優しく見守る



いつもより楽しそう(?)に勉強する小学生

教育ボランティア学生を派遣 ～佐賀県内の小・中学校 36 校に～

文化教育学部では、佐賀県教育委員会と連携・協力し、県内の小・中学校における教育ボランティア活動として、学生を派遣することになった。これは、同学部と県教委との間で、平成 17 年 1 月、教員の養成及び資質・能力の向上などを柱とした連携・協力協定が締結され、その事業の一環として進めてきたものである。同学部で実施体制を整備、県教委から県内小・中学校の意向を聞き、双方間で調整し実現した。8 月 1 日から、県内全域の小学校 28 校、中学校 8 校で、延べ 174 人の学生が教育ボランティア活動を開始している。

教育ボランティア活動は、教員志望の学生が、様々な学校現場での経験を積み、子どもに対する理解を深め、幅広いコミュニケーション力、将来の教員としての資質の向上につなげ、教職への意欲を高めさせることを目的としている。また、学校が取り組む学習指導や学校行事への支援を行うことにより、各学校の教育活動の充実を図ろうとするものである。

学生たちは、事前指導を受け、学校現場において、サマースクールでの算数・国語・英語などの補充指導の補助、少人数授業など授業中の学習指導補助、金管バンドやバスケットボールなど部活動指導の補助、運動会等の学校行事の指導補助、不登校傾向生徒への学習支援補助などを行う。

辻健児文化教育学部長は「予想以上に参加が多く、学生自身、体験活動の重要性を認識し始めている。県教委や各学校と連携し、教育効果を高めたい」と話している。



熱心に教える学生たち

8 月 4 日、5 日、11 日の 3 日間、佐賀市内の小学校でサマースクールの教育ボランティアとして参加した同学部学校教育課程 3 年の大野義仁さんは、「9 月には本番の教育実習があるので、とてもいい経験が出来た。このサマースクールを通じて、子供たち一人ひとりに個性があることを感じた。子供にどう接し、どうすればわかりやすく教えてあげられるかということがわかってきた」と話していた。

また、派遣を受けた小学校の先生は、「今の子供たちは、お兄さんお姉さんたちと接することが少ない。同年代であっても他のクラスの子や近所の子たちと遊ぶということが減ってきている。こういう形で、学生諸君と過ごすのはとても貴重なことである」と話していた。



キミは未来の科学者だ！



～サイエンス・マジック～

平成 17 年 8 月 4 日(木)、アバンセ（佐賀市：どんどんの森）において「リフレッシュ理科教室」が開催された。

今年で第 6 回目となるこの教室は、次の 8 つのテーマの楽しい実験・工作を通して、「身近なもので理科を楽しもう」という感覚を実感してもらうことを目的としている。

テーマ： えっ！くぎがはずまない 磁石復活 光のマジック！鉛筆が壁をつきぬける！？
あれっ！？空き缶が楽器に早変わり！ 手の平パワーで風車を回そう
アルギンボールで遊ぼう・レモンの不思議 溶けちゃった
あれっ？水がこぼれない！？ おやっ？ビー玉が 1 円玉をすりぬける！

全国にも「リフレッシュ理科教室」があり、それぞれの会場において独自な方法で開催している。今年も九州では福岡県と佐賀県で行われている。全国でも、参加者が一番多くしかも長く続けられているのは、佐賀県である。リフレッシュ理科教室（九州支部佐賀会場）実行委員長であり、第 1 回目からずっと活動を続けている佐賀大学工学部の藤田寛治教授によると、佐賀県の子供は全国でも有数の理科の素質があるという。会場には、事前に応募していた 700 人を超える小・中学生が集まり、皆サイエンス・マジックを体験した。

2005 年度リフレッシュ理科教室



藤田 寛治
実行委員長
(理工学部教授)

本教室は、子供達の理科離れ対策の一環で始めましたが、

皆様の献身的なご協力で毎年、盛況な教室となっております。開催に際しての基本方針を次の通りとしました。(1)毎年、同じ時期同じ場所で開催(8月の第1木曜日、アバンセ)(2)テーマは身近で、小・中学校教員が発案(3)理科の楽しくなる体験型学習(4)理科離れ対策は、現場教師の理科離れ防止から(5)参加無料。参加者も当初は佐賀市が中心でしたが、最近では県内全体に広がってきました。このことで、小中学校の先生との交流が深まり、お互いの信頼関係を構築できたと思います。例えば、小学校への「理科出前授業」を実現でき、子供達の理科への関心の大きさを認めることができました。

これらの経験を通して、佐賀県の子供達は、実に好奇心旺盛で、純朴に育っており、理科に対する素養は他県の子供に比べて本当に優れていると思います。問題は受験期になり、式が多くなる理科が苦手になることでしょうか。この好奇心をいかに持続させるかが今後の課題だと思います。

佐大同窓生4名 で起業



指紋認証システム

情報セキュリティの一翼を担う生体認証製品

今回は、経済学部を平成4年に卒業され、現在、株式会社ディー・ディー・エスの代表取締役である三吉野健滋氏に執筆していただきました。

(株)DDSは、産学連携による技術移転を元にした技術経営型ベンチャー企業です。名古屋大学、名古屋工業大学、オウル大学（フィンランド）など複数の大学からIT関連の技術移転を行っています。特に名古屋工業大学梅崎太造教授と共同で研究開発した指紋認証システムは、NTTグループ、会計検査院、佐賀県庁、名古屋市役所などに大規模導入され、情報セキュリティの一翼を担う生体認証製品として会社設立以来の大ヒット商品となっています。当社は平成7年9月に佐賀大学の同窓生4名（経済学部2名、理工学部2名）で起業し、現在役員数49名、資本金3億5千万円、売上高約12億5千万円、経常利益約2億2千万円（今期予想）の急成長中のベンチャー企業であり、2005年中に東証マザーズへの株式公開を計画しています。

設立時は資本金300万円の有限会社として名古屋市のインキュベーション施設で起業しました。理工学部在学中からゲームソフト開発を請け負っていたメンバーと、経済学部出身で証券会社にてファイナンスを経験した筆者との文理融合のチームで始めたものです。当時の主力事業はアミューズメント機器などの制御ソフトウェア受託開発で、いわばメカの下請け企業としてのスタートでした。95年はマイクロソフト社ウィンドウズ95の発売に熱狂的なユーザが列を作るなど、パソコン黄金時代の幕開けでした。しかし当社には、パソコンの世界では日本のITベンチャーは米国企業に追いつけないとの見通しがあり、ゲーム機器や情報家電、携帯電話などマイクロコンピュータ分野の技術開発が重要だと認識がありました。いまではユビキタスコンピューティングと言われているその分野に、なんとか地歩を築こうと行き着いたのが産学連携による技術開発のスタイルです。大学での研究成果による差別化を企図して、先端的な要素技術を携帯電話などのマイクロコンピュータ応用機器に組み込んでビジネスをしようというものです。97年から名古屋工業大学との共同研究を始め、99年には無線通信や大容量記憶装置などに使われるデジタル誤り訂正LSIなど自社製品販売を開始しました。その後2000年秋に発表した周波数解析法による指紋認証ソフトウェアが継続的に売上を伸ばしています。

昨今、ITベンチャー企業がマネーゲーム的なM&Aを繰り返し、見かけの成長を追う風潮があります。IT業界でヒット商品を連発して成長を続けることは難しいのですが、DDSではあくまでも技術開発に中心をおいたビジネスモデルを追求し、新しい付加価値を生み出す産学連携ベンチャーとして成長していきたいと考えています。

宜しければ弊社ホームページにおいでください。

<http://www.dds.co.jp>

夢に向かって羽ばたいた!!



設立当時のフोटグラフ

株式会社ディー・ディー・エス
代表取締役
三吉野 健滋氏

平成 17 年 4 月 佐大発ベンチャー企業創設 (株) SAGA 先端技術研究所 (I-SAT)

目的

- ・ベンチャービジネスラボラトリー、及びシンクロトロン光応用研究センターにおいて得られつつある**学術研究成果**を礎として、市場を意識した製品の実用化と商品化の為の研究開発及び製造・販売する。
- ・佐大生に**実践的教育の場**を提供する。
- ・佐大生をパートタイムで雇い、より現場に近いところを経験させて、**企業マインドを持った学生**を育てる。先々は、正規の従業員としても雇えるようにする。
- ・**地域企業の発展**のための研究開発支援、即ち技術的分野におけるシンクタンク的な役割を果たす。
- ・職が安定しない多くのポストク（非常勤研究員）の雇用の受け皿になり、**優秀な研究者を佐賀地域に残す**。
- ・起業して利益を上げることが目的とするのではなく、**大学への貢献を優先**する。

ベンチャー創設にかけた熱い思い

取締役副社長
(シンクロトロン光応用研究センター 教授)
おがわ ひろし
小川 博 司



会社創業の礎であり、また大きな切っ掛けとなったのは、ベンチャービジネスラボラトリーの設立による研究環境の拡充と、そこでの研究成果を背景とした佐賀県や経済産業省等からの各種の公的研究資金の援助でした。しかし、それらに対して勝るとも劣らない大きな駆動力となったのは、文部省（平成 10 年当時）に対する設置の要求に伴う責任感と、また地元新聞の紙面を通してなど、地域活性の希望の星として大きな期待が寄せられたことです。それまでの、“可能なら”から、“必ず”に向かって、関係者の気持ちが高揚したことは何にもまして重要でした。

会社設立に際しての苦労話は多々ありますが、その中であえて一つだけを挙げるとすれば、学内規則の制約から社長を学外に求めなければならないことでした。私共と一心同体となり代表取締役としての種々の責務を全う頂けるだけでなく、大学発ベンチャー企業であることから、人材養成の重要性を理解出来る人物であることが、必要不可欠の条件でした。幸いにも適任者を得ることが出来、いよいよこれから本当の苦難が始まりますが、この苦い味も“夢”を食べる上での重要な下味と心得、成功発展に向けて精進致したいと思います。皆様の温かいご支援とご鞭撻をお願い致します。

事業内容

- ・純緑色等の高効率発光ダイオードとその応用製品、及び関連製造装置の開発・商品化
- ・高齢化社会に対応したエレクトロニクス応用システムの開発・実用化
- ・シンクロトロン光を利用した加工技術及びその応用製品、並びに分析技術の開発と関連装置（製造、分析）の開発・商品化
- ・地域等の協力企業の研究開発支援



純緑色発光ダイオードの概要

発光ダイオード（LED）は既に色の三原色である赤緑青が実用化され広く普及している。しかし緑色系 LED に関しては、視感度のために他の色と比べ遜色ないが、そのパワー効率は極端に低いのが現状である。この波長領域は、照明、信号や表示器としての用途の

他、プラスチックファイバ通信用光源、携帯機器用光源などへの応用が期待されており、高効率・高輝度光源の開発が待望されている。

このようなことから、佐賀大学では、純緑色発光が期待されるテルル化亜鉛（ZnTe）に関する研究を長きに渡って行ってきており、従来困難であった電気伝導制御を世界で初めて実現した。この後、さらに研究を押し進め、最近では独自の手法により室温発光する ZnTe 純緑色 LED の開発に成功した。

(株) SAGA 先端技術研究所（I-SAT）では、この ZnTe 純緑色 LED の製品化技術開発を手がける予定であり、数年後のサンプル出荷を目標としている。



保健管理センターのスタッフ

らです。1年前後はかかると考えてよいと思います。2〜3年かかった例も稀ではありません。その間、何度となく、改善への明るい見通し(保証)を与え続けなければなりません。勿論、抗うつ薬による症状の改善は一時的にはみられますが、私の経験では、「時間が薬」というのが結論です。映画に喩えれば、幕が開けば、必ず幕は閉じる。それまで、時間を共有しながら、待つことが大切です。

また、うつ状態にある人は、外界からの刺激に非常に敏感になっています。健康な人が刺激というふうには受け取らないような些細なことでも、うつ状態にある人にとっては、大きな刺激となっていることがあります。特に、対

人関係における影響は大きいと思われ、それは人間の様々な感情を呼び起こすのはほとんどが人間によるもので、うつを引き起こす原因の多くも人間関係によることを考えると、当然なこともかもしれません。うつ状態からの回復をもたらずには、人間が大きな役割を持つていられるのだと考えます。確かに、刺激は大きいのですが、人間が本来、もっている暖かさこそが、うつ状態にある人を回復へと導くのではないのでしょうか。うつ状態になると、自分を守るために、殻に閉じこもり、闇に包まれていようような状態になります。その闇から抜け出すために、外界から差し込む暖かい光をたどっていくのは、最も自然な形だと考えられます。そのため、特別な接し方などは、ほとんど必要ないでしょう。人の言動に敏感になっているということは、何も悪い方ばかり敏感になっている訳ではないように感じられます。人の存在さえも煩わしく感じられる時もあるかもしれませんが、心のふれあい、もしくは、ただそこにおいて時間を共有してもらうといったことが、大きな意味を持つのではないのでしょうか。うつ状態になると、非常に不安を感じやすくなります。その不安を取り除くために、あらかじめ外的環境を調整することも大切ですが、不安を他者に受け止めてもらうこともとても大切なことだと思

います。また、どう接するべきかと思いをめぐらせながら、腫れ物に触るようになされたりすると、うつ状態にある人はきつと、自分の状態がこうだから気を遣わせている」と自分を責めて、心の負担を大きくしてしまつてしまうでしょう。心配されていることは分かっている、その言動を優しくして捉えるのは、難しい状況にあると考えられます。そういった意味では、状態を知らない人との交流も、大切かもしれません。うつ状態になってすぐの心身ともに疲労きつっている時には、十分な休養と、安心できる環境が必要です。しかし、その後は、様々な人と接することで、実際に感じとり、得られるものがたくさんあると思います。

うつ状態が回復するまでには、本人だけでなく、家族をはじめ周囲の人々にも、様々なことが起こります。しかし、うつ状態とは、一時的なものであり、必ず治るということを忘れずに、現実をありのままに受け入れていくことが大切なのではないでしょうか。そして、うつ状態にある人は、周囲の人の助けを借りて、柔軟に環境調整をしながら、日々の生活を送っていき、ふと気づくと回復していた、というようなスタンスでいるのがいいのではないかと思います。また、その過程で、再発を予防できる手掛かりを見つけていくことができるでしょう。

なお、佐賀大学では、本年度より学生カウンセラー(3名)と産業カウンセラー(2名)を学外非常勤として雇用することになりました。学生カウンセラーは学生のための心理の専門家による相談で、本庄地区では週2日(月・火)、鍋島地区では週1日(月・火)、鍋島地区では週1日(水)、いずれも正午から午後4時まで、産業カウンセラーは教職員のための心理の専門家による相談で、鍋島地区では週2日(月・木)、本庄地区では週1日(水)、いずれも正午から午後4時まで無料で相談を受けることができます。心理相談の予約は、大学のホームページ(「在校生向け」「職員向け」)にカウンセラーのメールアドレスが掲載されていますので、メールにてご予約ください。自分だけでは解決できないような問題に遭遇した際、第三者に聞いてもらうことで、問題解決の手掛かりが得られることもありますので、気軽にご利用ください。

こころの病

暖かいふれあいの大切さ



保健管理センター所長

佐藤

武

現代社会が抱えている問題のひとつに、人間の「こころの病」があります。高度に科学技術が発達し、あらゆる便利さを享受できるようになった反面、人間関係に悩む人や時代のスピードについて行くことができなくて悩む人が増えています。産業界では、効率性・経済性ばかりが叫ばれ経費削減の名のもとにリストラが行われ、その結果一人当たりの業務量が増大し多くの仕事を抱えて連日遅い時間まで残業を続けて病気になるってしまう人が、学校現場では、友達関係や勉強で悩み、不登校や家庭への引きこもりになってしまう学生がいます。これは、小・中学生や高校生だけではなく大学生にも当てはまります。

今回は、多くの人が直面するかもしれないこの問題に対して、佐藤武保健管理センター所長からアドバイスをいただきました。

だれでも1度はうつを経験することでしょう。その辛い体験を乗り越えることができずに、命を絶ってしまう人が増えています。その前に、うつになっていると気づかない人も多いのです。がんとか、骨折みたいな目に見える病気ではありませんので、どうしても周囲の人に自分がこんなに苦しんでいることが伝わらない。また、休むというのは敗者になって、周囲に迷惑をかけてしまうことになってしまいます。しかし、病気だから、仕方がないので。熱が40℃もある人が仕事や学校に行けるでしょうか。たぶん、ふとんの中に入って、体を休めるでしょう。うつ病も同じです。うつ病は一時的に頭が働かなくなる病気ですので、物事を普通に考えることができません。仕事の能率が極端に下がってしまうので、会社へ行っても書類がたまる一方で、ちゃんと、病気であることを説明して、正式に休まなければなりません。しかし、病気だというのは、病気だと気づかない人も結構多いのです。

自分で病院へ行くことができなかつたら、誰かと一緒に行きましょう。そして、正式に休みましょう。休めるよいうな世の中にしていかねばなりません。多くの人が自分の病気をすっかり治さないうちに、亡くなっています。うつ病の治療が難しい理由は、症状が改善するまで、かなりの時間が必要とされるか

学生センターからのお知らせ

学生カウンセラー(学外非常勤)相談窓口を開設しました。

佐賀大学学生カウンセラー相談窓口は、学生の心や身体の相談ばかりでなく、学生のキャンパスライフのあらゆる疑問や悩み、困っていることなどを支援するために平成17年7月1日から開始されました。

相談は、直接、相談したいカウンセラーのメールアドレスか電話番号に連絡してください。相談内容等の秘密は堅く守られますので安心して気軽に利用してください。

●学生カウンセラー(学外非常勤)

氏名	相談場所	相談日	メールアドレス等
石村 真理子	本庄キャンパス 学生センター内	毎週 月曜日 12:00から16:00	kaunseis@mail.admin.saga-u.ac.jp ☎0952-28-8418
吉村 春生	本庄キャンパス 学生センター内	毎週 火曜日 12:00から16:00	kaunseyo@mail.admin.saga-u.ac.jp ☎0952-28-8418
安田 郁	鍋島キャンパス 保健管理センター分室	毎週 水曜日 12:00から16:00	kaunseyo@mail.admin.saga-u.ac.jp ☎0952-34-3277



平成17年度 後学期の行事予定

- 10月 3日(月) 後学期開講
- 12月25日(日) 冬季休業(1月7日まで)
- 1月27日(金) 後学期定期試験時間割発表
- 2月 3日(金) 後学期定期試験(2月9日まで)
- 3月23日(木) 平成17年度学位記授与式
(場 所 佐賀市文化会館)
(開始時間 午前10時～)

編集後記

10月から長谷川学長による第2期の新体制が発足しました。本号では、長谷川学長に、これからの4年間への抱負を語っていただきました。法人化への移行期間は終わり、これからが学長の独自性やリーダーシップが問われることとなります。広報室も、法人化後に設置されましたが、学内外に徐々にその存在をアピールできるようになってきました。最も留意した点は、受け手の側に立った広報です。本誌にも前号からアンケート用の返信はがきを添付しています。読者の皆様のご意見を参考にしながら、魅力ある紙面づくりを目指したいと思っています。忌憚ないご意見をお寄せください。

(広報室長 早瀬 博範)

誌名の「かちがらす」について

佐賀大学学章

旧佐賀大学と旧佐賀医科大学の統合(平成15年10月1日)を機に、佐賀大学では平成16年1月16日に新学章を制定しました。これは、佐賀の県鳥である「カササギ」を図案化したものです。誌名もそれに従って、「カササギ」の愛称である「かちがらす」としました。カチガラス同様、佐賀大学も、多くの人々にとって、愛される大学になればという願いが込められています。

アンデス・アマゾン 自転車以南米縦断の旅

イキイキ人生

文化教育学部
人間環境課程

4年

にしのお
西野

りよお
旅峰

アンデス山脈をこえしていると、
4000m以上アルゼンチン



通った国は全部で6カ国。
ベネズエラ、ガイアナ、
ブラジル、パラグアイ、
アルゼンチン、そしてチ
リ。期間は8ヶ月。総移動
距離、約16,500km、自転
車の移動距離、約12,500
km。一日の最高移動距離、
221.5km。最高速度、93.4
km/h。最高高度、約4700
m。



アルゼンチンとブラジルの国境にあるイグアスの滝

4月8日、この日は僕にとって忘れることのできない日だ。

夢に向けて一步を踏み出した、2004年、春。自転車による南米縦断の旅。様々な困難と不安に揺られてはいたが、溢れだす期待が僕の頬に彩りを添えてくれた。

いつの時代でも、情熱の先に待ち受けているものを知ることはできない。欣喜？悲観？感動？幻滅？楽しみ？苦しみ？そして、生か、それとも死か。南米で何が僕を待っているのだろう。不安は当然だったが、不思議と迷いはなかった。“とりあえずいけるところまでいってみよう。なんとかかなる”そう思った。旅立てるしあわせを確かに感じながら、あの日僕は日本を発った。

8ヵ月後、抱えきれないほどの思い出とともに帰国した。そのすべてを書くことは難しいので僕自身が感銘を受けたことをふたつほど記そうと思う。

ひとつ、生かされているということ。数え切れないほどたくさんの親切をいただいて最後まで走り続けることができた今、自分という存在の小ささを感じずにはいられない。日本を飛び立つときでも、飛び立った後でも、支えてくれる人がいたからこそ僕は前へ進めたのだ。毎日毎日、必ず誰かが助けてくれた。人に逢わない日でも、常に心に支えてくれている人々がいた。

“自分で日々生きているのではない。多くの人々によって、生かされている”

格好をつけていうわけではなく、実感を含めてそう思う。真冬のアンデスで高山病にやられ、秒速30mの風と砂嵐に行く手を阻まれて動けなかったとき、僕は心の中でこれまでで出逢った人々を思い返した。日本で応援してくれている人々を思い返した。寒いのと頭痛で身体は満足に動かせなかったが、心だけは豊かにあたたかかった。朝起き

て夜眠るまでずっと、心の中の多くの人と会話した。僕という存在は多くの存在によって支えられているという事実を改めて知った瞬間だった。

もうひとつ、やさしさのバトン。

今回南米を旅していて思ったのは、なぜ人はこんなにもやさしいのかということだ。本当にたくさんの人が親切を分けてくれて、その中のある人が僕にこういった。

「リョオさん、僕はこれまでたくさんの人に親切にしてもらったから、今ここでそのときの恩を返すね。」

やさしさの源は人それぞれに違うのかもしれないが、大きな眼で見れば同じといえるかもしれない。ともあれこの一言は僕の生き方を変えてくれた。やさしさは、いただいた人に返すのは当然だけれども、同時に他の人に渡していこう。これからは僕も、たくさんの人にやさしさのバトンを渡していこう。「多くの人にやさしくしてもらったから、その恩返しね！」そういって。

みんなのおかげで支えられて、生かされている。だから僕も、出逢った人にそう思ってもらえるような生き方をしていきたい。南米の旅は大切なことを教えてくれた。周りの人の大きさと僕の小ささを教えてくれた。自然の大きさと僕の小ささを教えてくれた。

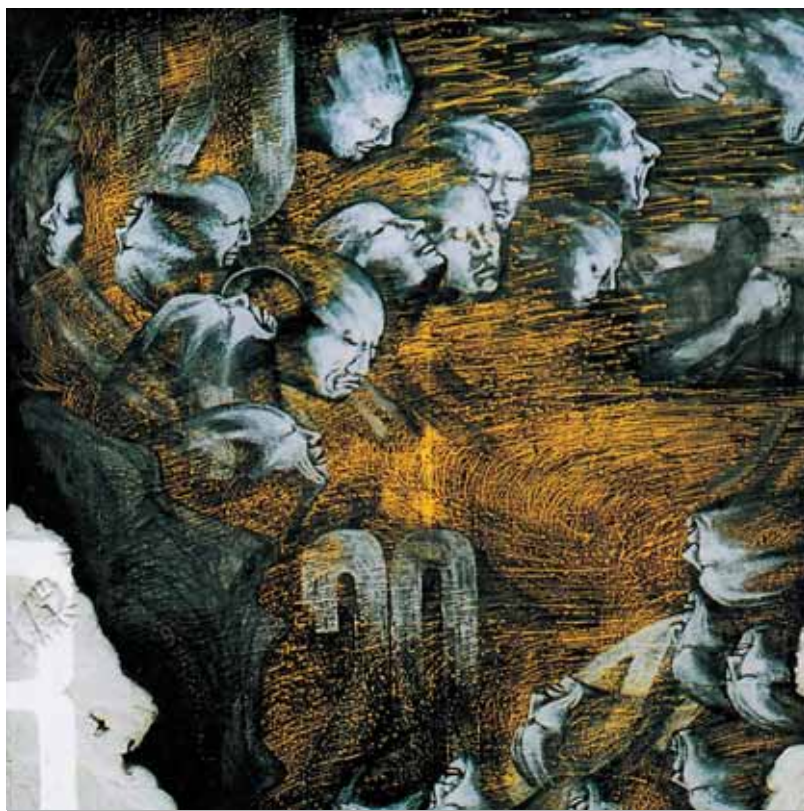
これでひとまず南米の旅は終わった。だが、僕の旅はまだまだ続く。夢はいつでも、僕の目の前にある。



アマゾンの中で
出会った家族と

作品名 「地下的衝動」

よし たけ 芳武 ゆう ま 雄馬 (文化教育学部美術・工芸課程4年・西洋画専攻)
(平成17年度佐賀美術協会展で最高賞の美協賞を受賞)



【作者プロフィール】

1981年熊本県生まれ。現在、文化教育学部美術・工芸課程4年次在籍。在学中に2年間ベルギーへ留学。西洋画を専攻。佐賀美術協会展、佐賀県美術展、その他公募展に出品し、入選・受賞。グループ展の発表活動にも積極的に取り組む。

【作者コメント】

決して表面に出ることのない、人間の内面的な衝動は、まるで硬いアスファルトの下で起こっている“地下的な衝動”のようなのだと感じ、色を削り出す、研磨するという手法を用いて表現しました。